



—東地中海地域ニュース—

レバノン：ヒズボラ書記長の演説とジュマイエル元大統領の反論

(2月17日付現地各紙および18日付ロリアン・ルジュール紙)

1. 2月16日、ナスラッター・ヒズボラ書記長は、ムグニエ・ヒズボラ軍事責任者他のヒズボラ幹部追悼集会で演説した（概要）。

① ヒズボラの武装解除問題

(1) 大統領、国会議長及び国軍司令部をはじめ多くのレバノン政治指導者は、イスラエルからの脅威を拒否し、国民が団結し服従しないとの公的な立場を示しており、ヒズボラはこれを賞賛する。

(2) 1カ月前からレバノン国内の一部では、何も行動を起こさなくとも抵抗運動（の武器）が単に存在するというだけで、イスラエルの対レバノン攻撃開始の十分な口実になるとして、イスラエルに（攻撃の）口実を与えないために武装解除すべきとの議論が始まった。これは危険なことである。イスラエルの攻撃を正当化し、そのいかなる攻撃にも先んじて抵抗運動に責任を帰しめるものである。イスラエルがある国を攻撃したいと望めば、イスラエルはそもそも口実など必要としない。

(3) 国際社会や国連諸決議がレバノンを守ってくれるであろうか。イスラエルがレバノンの領土や領海に対する野心を有しておらず、シェバア農場やクファル・シューバ丘陵をレバノンに返還すると信じられるであろうか。レバノンは現在、国軍・国民及び抵抗運動によってかつてなく強力であり、世界に例を見ない防衛戦略の形態を有している。

② 対イスラエル関係

(1) イスラエル首脳や軍高官の言葉は全て、イスラエルが結果を保証できない戦争に向かう可能性がないことを示している。イスラエルは軍事的能力の向上に努めながら、イスラエル指導者の間にも戦争の費用対効果をめぐって議論がある。イスラエルの政策は、（シリア、イラン、ヒズボラ、パレスチナ諸派の）相手の軍事的能力向上を妨げることに基づいている。

(2) イスラエルがレバノン領内に攻め入れれば、我々はレバノン領内で粉砕する。我々はもはや、完全で迅速かつ明白に勝利するという言葉をイスラエルから聞かなくなった。イスラエルはレバノン国境を見て平穏と思うかも知れないが、よく見れば数万人ものヒズボラ兵士がいることに気が付くであろう。

(3) イスラエル空軍は、2006年夏の対レバノン大規模攻撃における攻撃以上のことは出来

ない。イスラエルがレバノンを攻撃するならば、我々はイスラエルを攻撃する。ベイルート空港を攻撃するならば、ベングリオン空港を攻撃する。港湾、石油精製所、発電所などを攻撃するならば、イスラエルのこれら施設を攻撃する。我々は、防衛のために誰の助けも必要としておらず、レバノンは国軍、国民、抵抗運動をもって国家を守ることができる。

(4) ヒズボラは戦争を望んでおらず、過去のいかなる時も戦争を望まなかったが、我々は国土を防衛し、国民の尊厳を守る当事者である。

2. ジュマイエル元大統領の反論

アミン・ジュマイエル元大統領（キリスト教マロン派カタールエブの指導者）は、今般のナスラッター書記長の演説に関し「どこまでがヒズボラのレバノンとしての目標で、どこからがイランとしての目標なのか？」と題した反論（概要下記）を発表している。

- ① ヒズボラの武器は、イスラエルからレバノンを防衛するためのものであるという主張は説得力に欠ける。特に、2008年5月8日、これら武器がどのように使われたかに鑑みれば、なおさらである。イスラエルに抵抗するため抵抗運動を国軍に統合することを妨げているものは何か。祖国の防衛は国民的義務であり、党派的なものではない筈である。
- ② ヒズボラがイスラエルを殲滅するまで武器を手放さないと述べたということは、抵抗運動がレバノンのものではないことを意味する。ヒズボラはどこまでが彼らのレバノンの目標で、どこからがイランの目標であるのかを率直に我々に示すべきである。